

+ONENESS

中村 智裕 (指導教員 八尾 廣)

+ 1

近年、ネットワークの高速化、広域化、我々が現在使用しているツールの電子化が進み、人々は移動せずとも様々な情報を得ることができ、手にし、見る事ができるようになった。それによりコミュニティの軽視化、軽薄化が問題となると私は考えた。また、高齢化社会に伴い人々の目は完全高齢者に向け、福祉施設など高齢者向けの施設が増加している。次世代ツールを扱う若者の為に人と人とのコミュニティ空間を提案したいと考えた。それは決して内包的なモノではなく都市レベルまで発展していく可能性を秘めたコミュニティを創りたい。

+ 2

敷地対象として選んだのは学生の街、町田の本庁舎跡地である。

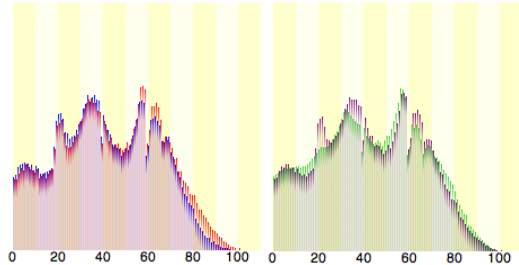


敷地前を通る町田街道はかつて八王子と横浜間の絹を運ぶ道“シルクロード”の新道であり、

町田市は中継地点として旧来からの商店街を中心に宿場町として栄えてきた。現在でもそれらの街の名残があるが、商業ゾーンとしての急発展により様々なビルディングタイプが乱立し独特な街並を形成している。

近年、榎文彦設計による町田市新庁舎の計画に伴い、旧町田本庁舎の中身は移行される。

コミュニティの中心となるキーパーソンは学生である。

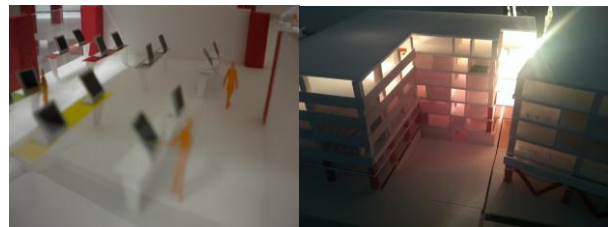


上のグラフは町田市の人口平均と全国の人口平均との比較である。(紫が町田、緑が全国) 右のグラフを参照してわかる通り、20歳前後のグラフだけ町田が飛び抜けている。このことから学生の為の集合住宅を計画したいとの考えに至った。

+ 3

REFINE

表では町田のランドマークとして本庁舎を複合施設へリノベーションし、その裏に学生の為の集合住宅を計画する。リノベーションプランは、既存の建築のもつグリッド、地形、幾何学的法則を尊重し計画するというルールを設けた。重点的に改修を行うのは地域住民が利用しやすい1、2階部分で、トラスを新たに組む事によりガラス張りにし柱を赤く塗る事により視覚的に刺激を与え新装感を感じることができる。プログラムはスポーツジム、サテライトキャンパス、多目的室など、若者やノマドワーカーの為の施設が入る。



3、4、5階にはオフィスが入る。市役所としての事務機能をそのまま残すので安価で貸し出す事ができる。6階にはカフェ、レストラン、公会堂の二層吹き抜きの空間を使いスポーツアリーナを計画する。

GUERRILLA THE INCUBATION PERIOD

町田に突如として現れる学生をゲリラと見立て、それらを集約する潜伏地点をつくる。

複合施設の裏に潜伏し、構え、住居単位が斜めにずれ合いながら積み上がることにより太陽の光を浴び、様々なカタチの共用スペース（庭）が生まれる。



行けそうで行けないお隣さん（気になるあの子）の庭、仲のいい奴らとつるむ完全な共用庭、一人でもりたいたいの為の完全な独立庭。



夜。学校帰り。バイトへ行く学生、部屋でくつろぐ学生

表の複合施設のジムへ汗をかきにいく学生。

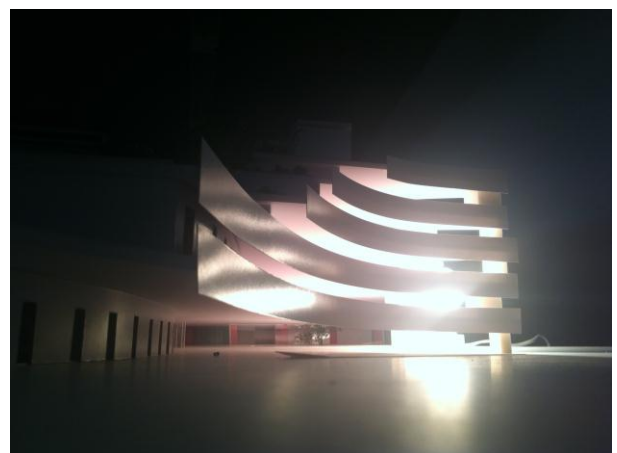


朝。庭で伸びをするジジイみたいなあいつ。朝から近くのラーメン屋へ繰り出すへ太めの彼ら。

+ONENESS

裏にとどめたコミュニティーはいつか飽和し都市へと漏れ出す。その漏れ出し範囲として斜めに積みあがった反対側（都市側）の空間を開かせている。

既存の湾曲した外観と外壁の幾何学的法則を継承し広げ、都市へと繋がっていくような空間を創造した。コミュニティーを創るのは建築ではなく人であり、私の役目は場所を創る事である。



裏の世界が表へと漏れ出し、裏と表、人と人が繋がった時、この建築は完成する。